資料

石川県立看護大学の災害時対応の備えに関する一考察 －「健康管理チーム派遣」に関わった教職員への調査から－

林　一美　水島ゆかり

概　要

本研究は，本学の能登半島地震への健康管理チーム派遣の経験を踏まえ，本学の災害時対応における備えについて考察することを目的とした．

健康管理チーム派遣に関する準備については，大方の者が物資と身繕い・服装の準備をしており，派遣にあたり心がけていたことがあった．調整に当たった者は，健康管理チーム派遣がうまくいくように調整役割をとっていた．派遣に関する援助活動の上で困り事があった者が多かったが，参加してよかった・また参加したいと考えている者が多かった．健康管理チーム派遣への本学の備えについては，「不十分」・「わからない」の意見が多かった．しかし，備えの必要性の有無については，多くの者が必要ありと答えていた．

キーワード　能登半島地震，健康管理チーム派遣，災害時対応，大学の備え

１．はじめに

平成19年3月25日に能登半島地震が発生した．本学では，石川県から健康管理チーム派遣の要請を受け，3月26日～4月1日と4月27日～29日に教職員・大学院生が関わった。これらの経験を踏まえ，本学の災害時における備えについて考察することを目的に調査をおこなった．

なお本研究では，健康管理チーム派遣を以下のように定義する．

健康管理チーム派遣：石川県から要請を受け，本学からA市避難所へ被災者に対する健康管理を目的として派遣された教職員チームの派遣をいう．

２．方　法

２．１　対象者

本学の健康管理チームメンバー（以下、派遣メンバー）となった教職員31名・大学院生3名，計34名のうち，調査時に在職していた教職員21名を対象者とした．対象者は派遣メンバーとして派遣された者だけでなく，大学において健康管理チーム派遣の調整・支援に当たった者も含んでいる．なお派遣メンバーのうち2名は，本調査作成者であったため対象から外した．

２．２　調査方法と調査項目

調査は，独自に作成した調査票を用いて，健康管理チーム派遣から6ヶ月経過した2007年10月に実施した．調査票は対象者に個別に配布し，回収はメールボックスへ投函してもらった．

調査項目は，①災害体験の有無・災害救護体験の有無と災害の種類，②派遣に関する準備・調整・心がけ，③派遣に関する援助活動上の困り事と内容，④健康管理チーム派遣への参加についての思い，⑤健康管理チーム派遣の備えの充足と理由，⑥健康管理チーム派遣の備えの必要性と内容，⑦本学が避難所となった場合の備えについての意見，であった．

２．３　分析方法

調査項目毎に単純集計を行い，自由回答のデータは類似している記述内容の概要についてまとめた．

２．４　倫理的配慮

調査の趣旨を調査依頼文にて説明し，同意を得た．回答については，個人を特定できないように処理した．

３．結　果

回答の得られた教職員は13名で，回収率は62.0% であった．

３．１　災害体験と災害救護体験

今回派遣された13名全員に災害体験はなかった．また，災害救護体験については，１名が震災についての救護体験があった．

３．２　健康管理チーム派遣に関する準備・調整・心がけ

派遣の準備・調整にかかった時間は，0.5〜1時間未満が１名（7.7%），1〜3時間未満が５名（38.5%），3〜5時間未満が３名（23.1%），5時間以上が１名（7.7%），記載無し３名（23.1%）であった．準備した事柄の記述内容は，「物資の準備に関する記述」が８件，「身繕い・服装に関する記述」が３件あった．派遣にあたって調整した事柄の記述内容は，「家族への連絡に関する事柄」３件，「健康管理チーム派遣のための人員や日程の調整に関する事柄」２件，「派遣メンバーからの連絡・報告に関する事柄」2件，「関係機関との連絡・調整に関する事柄」２件，その他としては「学生の安否確認」，「学内教員への経過報告」，「体調を崩した教員への対応」，「健康管理チーム派遣の見送り・帰学時の対応」等について記述されていた．

派遣にあたり心がけていたことがあった者は9名（69.2%），心がけがなかった者はいなかった．心がけたことについては，「被災者への態度に関する記述」5件，「自分の体調管理に関する記述」3件，その他としては「派遣メンバーへの配慮」について記述されていた．

３．３　健康管理チーム派遣に関する援助活動上の困り事

派遣に関して援助活動をする上の困り事があった者は10名（76.9%），困り事がなかった者は１名（7.7%）であった．困り事については，「本務の滞りに関する事柄」２件，その他としては「時間とともに変化する情報への対応」，「避難所での具体的ケア内容」，「過酷な作業への適応」，「自分の安全管理」，「住民との連携」，「派遣に関する保険」，等の記述がされていた．

３．４　健康管理チーム派遣への参加についての思い

参加して良かったと答えた者は10名（76.9%），良くなかったと答えた者は１名（7.7%）であった．参加して良かったことは，健康管理チーム派遣に関する「実体験をとおした学びに関する記述」7件，その他としては「困ったときは助け合う」，「住民から必要とされていなかった」，「派遣人数等が適切でない」，「自分は役不足であった」という記述がされていた．

健康管理チーム派遣にまた参加したいと答えた者は９名（69.2%），参加したくないと答えた者は１名（7.7%）であった．その理由としては，「役立ちたい」6件，その他としては「県職員として当然」・「関わらざる得ない」，「今回の反省を踏まえて考えたい」・「関わりたいが自分にできるか不安」，「災害時のこころのケアに関心がある」という記述がされていた．

３．５　本学の健康管理チーム派遣の備え

今回の健康管理チーム派遣についての本学の備えが，十分であったと答えた者は２名（15.4%），不十分であったと答えた者は４名（30.8%），わからない者が６名（46.2%）であった．不十分な理由としては，「備品は揃ったが，安全上必要な物品（ヘルメット・懐中電灯等）が少ない」，「災害時に対応させる資金がない」，「学生安否確認の連絡体制の整備がない」，「配備体制基準の周知が十分でない」等の記述がされていた．また，健康管理チーム派遣への備えの必要性については，備えは必要と答えた者は９名（69.2%），わからない者は１名（7.7%），備えは不必要と答えた者はいなかった．備えが必要とされる事柄として，「派遣時に必要な具体的物品」6件，「マニュアル・手順」4件，「教職員の災害への心構え等」3件，「学内・県・関係機関との連絡・協力体制」2件，その他として「融通のきく資金」，「派遣時の役割分担」，「緊急時対応」が記述されていた（表 1）．

３．６　本学が避難所となった場合の備え

今回の健康管理チーム派遣の経験した状況が，避難所として本学に起こった場合についての意見は，以下のような記述がされていた．「大学建造物の使用方法の明確化」6件，「行政（県・かほく市・宝達志水町）との（人・物資の）連携」4件，「教職員の役割」2件，「学生への対

応（授業・実習の措置，学生の役割分担）」2件，「マニュアルの作成」2件であった（表2）．

4．考　察

石川県は，有感地震の数が全国的にも少ない地域であるが，30年に1度は被害地震が発生している[1)]．しかし，県民の震災に関する危機意識は低く，本学教職員においても同様であったと思われる．今回の派遣メンバーにおいて，1名は災害救護体験をしていたが，残りの大方は初めての経験であった．健康管理チーム派遣の準備に関しては，大方の者が物資と身繕い・服装

表1．備えが必要とされる事柄

記述内容の概要　（記述項目件数）	記述項目
派遣時に必要な具体的物品（6件）	・専用の携帯電話 ・救援物資 ・簡単な常備薬 ・寝袋 ・ヘルメット ・毛布
マニュアル・手順（4件）	・被災地へ赴く時の最小限のマニュアル ・非常事態への対応（安全・効率的な）マニュアル ・救護チームの編成手順 ・マニュアル
教職員の災害への心構え等（3件）	・教職員の災害意識向上に関する啓発 ・職員の災害時への心構え ・（災害にそなえた）日頃の覚悟
学内・県・関係機関との連絡・協力体制（2件）	・連絡体制（学内・県）と派遣までのシステム ・学内・関係機関との連絡・協力体制
その他	・融通のきく資金 ・派遣時の役割分担 ・緊急時対応

表2．本学が避難所となった場合の備え

記述内容の概要　（記述項目件数）	記述項目
大学建造物の使用方法の明確化（6件）	・ライフライン等大学建造物の使用法について整理しておく ・ライフラインの把握や大学を避難所として見立てたシュミレーションをしておく ・避難所としての設備としては最適だと思うので，救援物資の用意があればよい ・プライバシー確保のための工夫があればよい ・避難用として使用するスペースを決めておく ・各教室・実習室のスペースの有効な使用方法を決めておく
行政（県・かほく市・宝達志水町）との（人・物資の）連携（4件）	・対策本部となる県との共通認識・人員・物資の移動ルートの確認 ・行政・医療機関との連携体制の確認 ・備蓄物についてかほく市との連携・連絡をとりながら行う（宝達志水町とも必要かもしれない） ・かほく市が方針策定の際から積極的参加・協力をする
教職員の役割（2件）	・教職員の役割の明確化 ・教職員の役割分担
学生への対応（2件）	・講義や実習等教育への影響をどのようにするかの想定 ・学生をどのように参与させるかの方針
マニュアル作成（2件）	・大学が避難所になったときの最低限のマニュアル ・マニュアルが必要

の準備をしていた．未経験である派遣に関して，派遣メンバーそれぞれが考えて準備を行っていた．これらについては，事前に必要物品リストなどを作成したり，災害の情報提供や注意示唆を行うことが必要である．

派遣メンバーの調整に当たった者は「健康管理チーム派遣のための人員や日程の調整に関する事柄」，「派遣メンバーからの連絡・報告に関する事柄」，「関係機関との連絡・調整に関する事柄」等，健康管理チーム派遣がうまくいくように調整役割をとっていた．災害時の看護活動を行う看護者にとって，後方支援はなくてはならないものである．後方支援の例として，セルフケアの方法を伝える，激励と労をねぎらう，支援活動に必要な物品をそろえて提供する，金銭的支援，情報提供・情報交換，勤務調整，事務手続き上の特別対応，緊急連絡体制の整備，協力者への感謝等があげられており[2]，今回の健康管理チーム派遣の後方支援においては，その役割が果たせていたと考える．今回の方法を踏まえた，本学の災害時における後方支援のあり方を検討しておくことが重要である．

派遣メンバーの7割の者が，派遣にあたり心がけていたことがあったと答えている．心がけたことでは，「被災者への態度に関する記述」が最も多かった．派遣メンバーらは，関係行政機関所属保健師と連携を図りながら，出来ることを精一杯看護実践していた．派遣メンバーらが，被災者に対する自らの態度が及ぼす影響を考えながら看護実践をしていたことは，派遣された者としての自らの立場を認識しながら活動していたと推測される．大方の者が派遣に関して援助活動をする上での困り事があった．困り事の記述は，「時間とともに変化する情報への対応」，「避難所での具体的ケア内容」，「住民との連携」，「過酷な作業への適応」，「自分の安全管理」，「本務の滞りに関する事柄」，「派遣に関する保険」，と多岐にわたった．派遣メンバーの誰もが初体験であり，個々が考え，仲間で互いに確認しながら事に当たらざる得なかったと推測される．派遣メンバーは，参加してよかった・また参加したい考えている者が多く，参加した者は「実体験をとおした学びに関する記述」をしており，「役立ちたい」と考えていた．このように，健康管理チーム派遣に関わった教職員各自が，体験をとおして感じた心情的な側面は，災害時対応を今後検討する際にきめ細やかな対策に活かされていくと考える．

健康管理チーム派遣の本学の備えについて，今回の派遣時の備えは，「不十分」・「わからない」の意見が多かった．備えの必要性については，7割近くの者が必要であると答えていた．備えが必要とされる事柄として「派遣時に必要な具体的物品」，「マニュアル・手順」，「教職員の災害への心構え等」，「学内・県・関係機関との連絡協力体制」であった．今回の派遣メンバーの経験を活かした災害時対応について，全学的に検討することが望まれる．

かほく市の防災マップでは，本学体育館・運動場が避難所指定になっている[3]．避難所指定にはなっているが，近隣被災者が本学体育館や運動場に避難してきた場合への対応について検討はされていない．健康管理チーム派遣の経験した状況が，避難所として本学に起こった場合には，「大学建造物の使用方法の明確化」，「行政（県・かほく市・宝達志水町）との（人・物資の）連携」，「教職員の役割」，「学生への対応（授業・実習の措置，学生の役割分担）」，「マニュアルの作成」等の備えが必要であると，派遣メンバーらは考えていた．災害時において本学教職員は，看護職を育成する大学として，又県民の公僕としての対応が求められると想定される．教員・事務職員相互が果たせる役割分担を明確化し，協力しながら，本学の体制づくりを検討していく必要がある．

5．まとめ

能登半島地震発生において，健康管理チーム派遣に関わった教職員21名を対象者として，教職員の経験をふまえ，本学の災害時における備えについて考察することを目的に調査をおこなった．

健康管理チーム派遣に関する準備については，大方の者が物資と身繕い・服装の準備をしており，派遣にあたり心がけていたことがあった．大学において健康管理チーム派遣の調整に当たった者は，健康管理チーム派遣がうまくいくように調整役割をとっていた．派遣に関する援助活動の上で困り事あった者が多く，困り事の記述は多岐にわたった．参加してよかった・また参加したい考えている者が多く，参加した者は「実体験をとおした学びに関する記述」をしており，「役立ちたい」と考えていた．今回の健康管理チーム派遣への本学の備えについて

は，「不十分」・「わからない」の意見が多かった．しかし，備えの必要性の有無については，多くの者が必要ありと答えていた．

健康管理チーム派遣の経験した状況が，避難所として本学に起こった場合には，「大学建造物の使用方法の明確化」，「行政（県・かほく市・宝達志水町）との（人・物資の）連携」，「教職員の役割」，「学生への対応(授業・実習の措置，学生の役割分担)」，「マニュアルの作成」についての備えが必要であると，派遣メンバーらは考えていた．

謝　辞

今回の調査にご協力頂きました本学の教職員の皆様に深く感謝致します．なお，本論文は，石川県立看護大学共同研費（平成19年度）の研究助成を受けて行った調査である．

引用文献

1）石川県防災会議：石川県地域防災計画（震災対策編），16，平成18年修正，

2）社団法人　日本看護協会：先駆的保健活動交流推進事業　災害看護のあり方と実践，89-91，1998

3) かほく市防災会議：かほく市地域防災計画，316，平成17年3月策定，かほく市

（受付：2007年11月16日，受理：2007年12月19日）

Consideration of Disaster Preparedness at Ishikawa Prefectural Nursing University －Based on a Survey on Our University Staff Involved In the "Health Care Team Dispatched for Disaster Aid"

Kazumi HAYASHI, Yukari MIZUSHIMA

Abstract

The purpose of this study is to examine the preparedness of this university in times of disasters, based on the experience of a health care team that was dispatched on the occasion of the Noto Peninsula Earthquake.

As for the preparation for dispatching a health care team, it should be noted that many members already had their supplies, personal items and clothes in order and ready for an emergency on short notice. Those in charge of coordinating the actions had played an adjustment role for successful emergency actions. Still, many faced personal difficulties in participating in the relief actions；but many were happy to have participated and want to be included in the group again. When questioned on the preparedness of the university in dispatching a health care team, many stated that the preparation is "insufficient" or they were "not sure" about it. However, they recognized the need for being prepared.

Key words　Notohanto earthquake, health care team dispatched for disaster aid, disaster preparedness, preparation by a nursing university